

## 2015-16 年度 国際ロータリー第 2690 地区奨学金 報告書

山本 浩貴 (境港 RC 推薦)

### 1. 学業面での成果

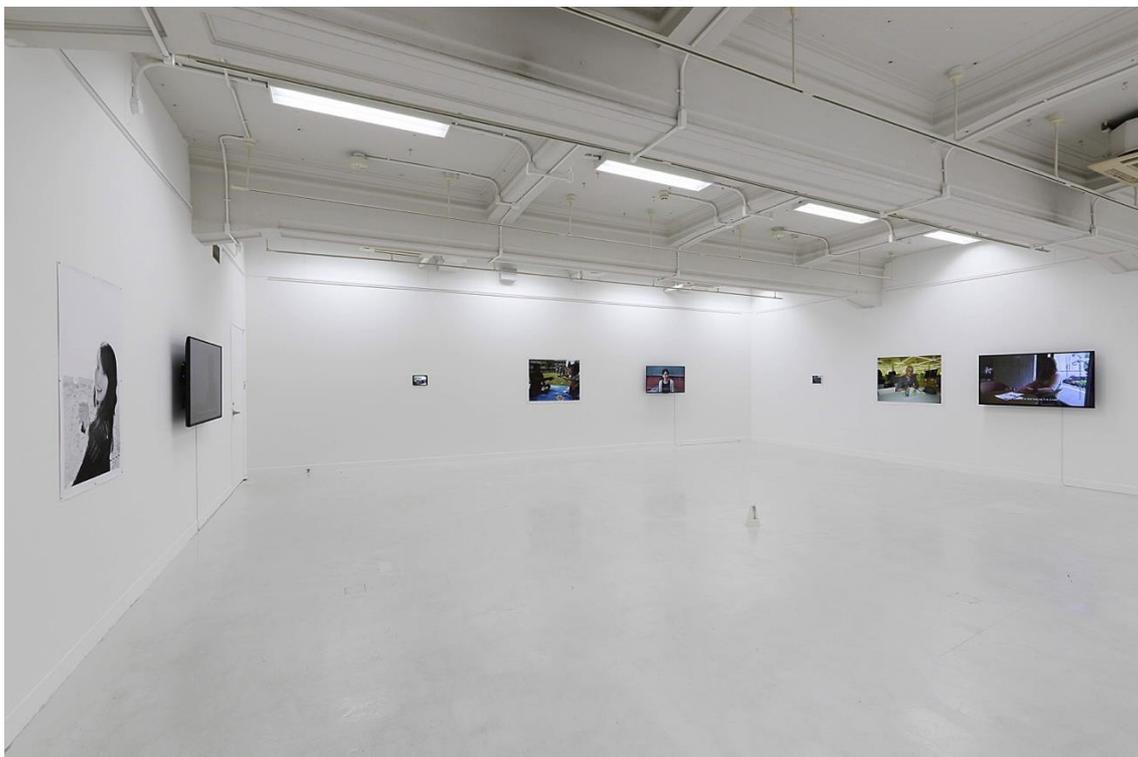
私の研修の独創性は、自身の社会学のバックグラウンドや博士課程学生としての研究環境を活かした、アートの分野に限定されない幅広い学際的なアプローチからのアート・プロジェクトです。私は、研修期間中にも欧米やアジアで開催される国際学会に参加し、論文発表を通して自身の考えを公にし、さまざまな視点からのフィードバックを獲得してきました。主な学会としては、イギリスのロンドンゴールドスミス・カレッジで開催された「*Sites of War: An Interdisciplinary Colloquium*」やインドネシアのスラバヤで開催された「*Inter-Asia Cultural Studies Conference 2015*」などです。特に IACS はアジアの文化研究に従事する学生や研究者が一堂に会する国際学会であり、日本人である私からは見落としがちな観点が韓国や中国、香港の研究者たちから提出され、プロジェクトの発展にたいへん実りある議論ができました。私は、「*Aesthetics for Decolonisation: Postcolonial Socially Engaged Art Beyond the Binary of the Coloniser and the Colonised*」という題の論考を発表しました (写真 1)。



## 写真 1：スラバヤ（インドネシア）での国際学会の様子

また、研修計画書には、1980年代を中心に黒人アーティストによって人種差別に抗するために行われた黒人芸術運動の学際的な再検討のResearchを行うという計画を書きました。その中心的人物のひとりでもあり、私の博士課程の指導教官のひとりでもあるソニア・ボイス氏との定期的なミーティングを通して、文献のみならず、その運動に関わった、そして関わり続けているアーティストたちの生の声を集めることができています。その成果のひとつとしては、図書新聞のリレー・エッセイ「レイシズム・ヘイトスピーチを考える」への2回にわたる寄稿があります。私はここで、この運動を現在の東アジアのコンテキストの中でのように考えることができるかを学際的な視点から考察しました。1回目は「Art against Racism: Thinking about the Role of Art in the Anti-racism movement from the 'Black Arts Movement' in the 1980s UK」、2回目は「Diversity of the Anti-racism Strategies in British Black Art: Cases of Claudette Johnson and Lynette Yiadom-Boakye」というタイトルで掲載されました。

以下の写真は私が京都で行った個展の写真です(写真 2)。



## 写真 2：京都芸術センターでの個展（写真：前谷開）

「移動する人々と街を歩く」（2015）は、「移民」と呼ばれる人々と一緒に行ったプロジェクトです。この作品では、「ヴェトナム人」、「白人」あるいは「在日コリアン」といったカテゴリーへの疑問を投げ掛けることがなされています。このインスタレーションは、私と参加者の方々、あるいは参加者の方同士の対話の映像によって構成されています。このインスタレーションは、現代社会における人や物の「移動」が含む問題（外国人参政権の問題など）や肯定的な可能性（異文化との交流のなかで生まれる新しい思考など）について鑑賞者の思考を促します。また、ギャラリーの中心に置かれているメトロノームが刻むリズムは、文化や時代に関わらず全ての人間が共有しているとされる原始的な時間感覚を私たちに喚起させます。このプロジェクトは、アートが「他者」を表象することの暴力性についての洞察から始まりました。「難民」など「弱者」あるいは「抑圧された者」というカテゴリーに含まれがちな人々をアートが表象することによって、そのような周縁化を促すステレオタイプを再生産する危険性があるのではないのでしょうか。そこで、このプロジェクトでは、さまざまな内的差異を含む「移民」の方々の生の声を丁寧に拾うことで、「ヴェトナム人」や「白人」といった一枚岩的なカテゴリーを徐々に解体していくことを目指しました。例えば、映像の一部では、実際に難民の方々と工場労働を行った参加者から、彼らの抱える苦しみとともに、彼らの自らの仕事に対する真摯な姿勢や誇りを抱く姿が生き生きと語られています。また、あるヨーロッパから来た方は、ヨーロッパ人であるという理由だけで英語が話せると思われてしまうことへの困惑を吐露しています。

## 2. 受け入れ地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流

カウンセラーの Rab Martins 氏と連絡を取り、8月26日に英国での受け入れ先クラブであるロンドン郊外の Watford Town and Country Club を訪問致しました。夕食会に参加させていただき、簡単なスピーチをさせていただきました。また、境港のロータリークラブのフラッグをお渡しさせていただき、Watford のフラッグと交換させていただきました(写真3)。また、当日は現地の障害をもつ子どもたちのための施設を運営されている方のスピーチを聴かせていただき、日本での美術を通じた児童教育などについて意見交換をさせていただきました。

たいへん貴重な機会でした。

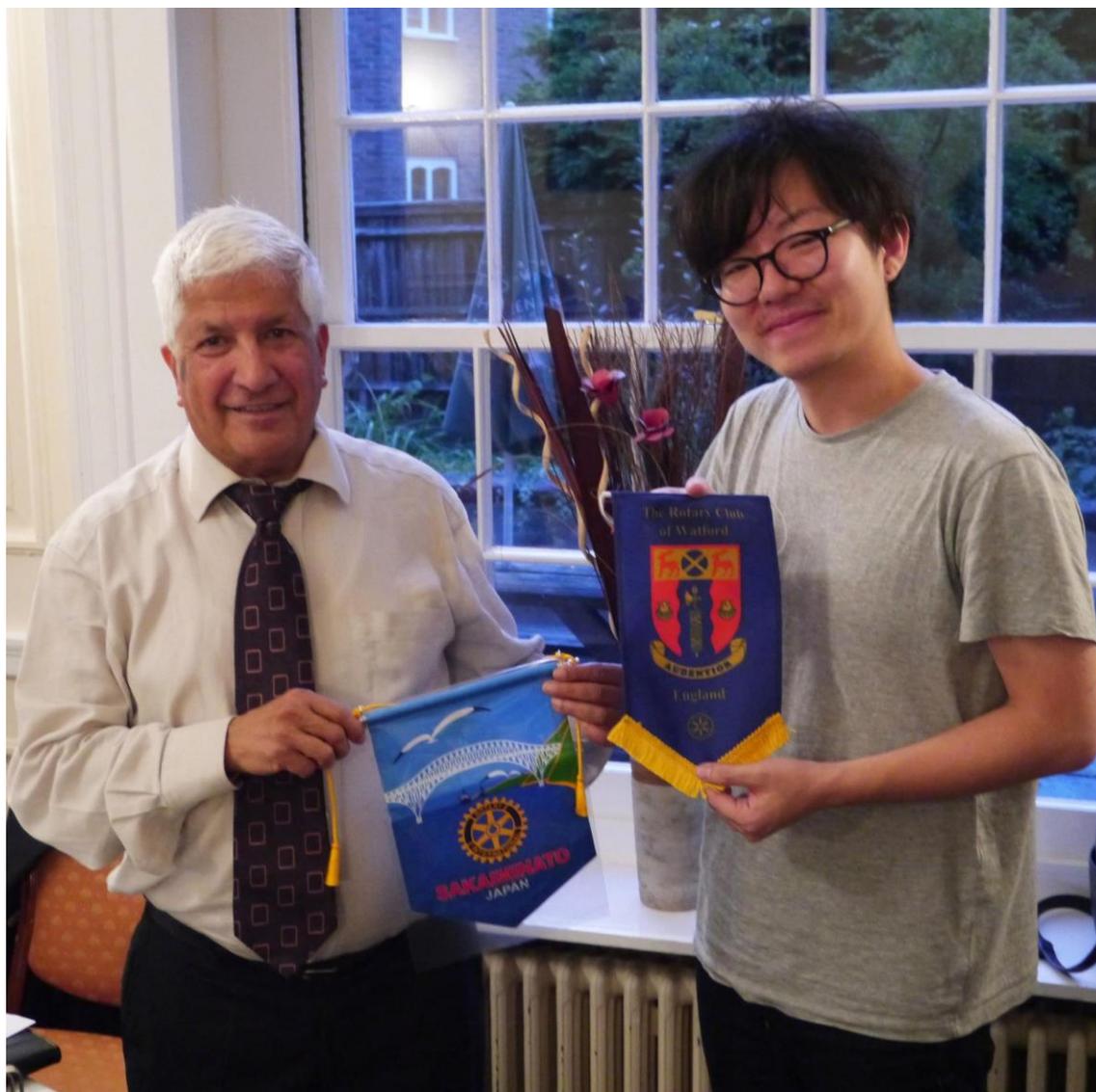


写真 3 : カウンセラーのラビ氏と

### 3. 直面した課題、問題点等

学業面、あるいは美術作家としての活動については、運や出会いにも恵まれ、たいへん順調に進んでおります。また、健康面についてもさまざまな方々のサポートのおかげで良好です。あえて挙げるとすれば、私の場合は研究と制作を並行して行っていることもあり、つい閉鎖的になってしまい、社交の場に出る機会が少なくなってしまうので、機会があればさまざまな国や専攻の

方々との交流や意見交換の機会をもう少し増やしていきたいと考えています。

#### 4. 今後の目標

上半期のリサーチおよび制作の結果を批判的に分析し、新たなプロジェクトを行います。現在、私は「植民地的想像力」という概念に注目しています。私の研究の中では、これを'colonial imaginary'と呼んでいます。東アジアにおける植民地的想像力は、大日本帝国の植民地政策を中心とした、戦争と支配の歴史の中で生産されてきたもので、旧加害国・旧被害国いずれの国に暮らしているに関わらず、そこに暮らす人々のものの見方や考え方に無意識に大きな影響を与えています。植民地的想像力は、まさに知覚や欲望、あるいは(無)意識といった、まさに「精神と心」の領域で働き、しばしばさまざまな社会＝政治的な諸問題を引き起こします。この植民地的想像力に由来する自民族中心主義的なステレオタイプがあると私は考えます。グローバル化がますます加速し、今後日本もさらに多文化的・多民族的な国家へと移行していかざるをえない状況において、この植民地的想像力を「脱植民地化」していく作業は、東アジアが一致協力して進めていかななくてはならない最大の課題のひとつです。歴史的に見れば、日本の敗戦とともに徐々に始められるべきであったこの脱植民地化の過程は、その後すぐに勃発した冷戦の構造(朝鮮半島の分断、かつて敵国同士であった日本・韓国・台湾がすべて資本主義陣営に組み込まれてしまったことなどを指します)の中で頓挫し、政府レベルにおいても草の根レベルにおいても、現在まで十分に為されてきてはいません。冷戦構造が崩壊しつつある今こそ、この脱植民地化の作業が再び進められるべきであると私は考えます。そのような植民地的な想像力を解体するために、私はロンドンで出会った、現在文化庁の新進芸術家海外研修制度の助成によってイギリスに滞在している、ペインターの猪瀬直哉氏とコラボレーションという形でプロジェクトを計画しています。このプロジェクトは、イギリス・ダーラムのオリエンタル美術館から展示の誘いがあったことをきっかけに始めたもので、「オリエンタリズムからポストオリエンタリズムへ」というタイトルを予定しています(写真4)。このプロジェクトは、オリエンタル美術館の資料やさまざまな文献から、西洋が東洋を見るときステレオタイプについて、文章の形でしか残されていないものを絵画に落とし込むことによって、イメージ化する試みです。私は、西洋の文章のみならず、東

洋内部に存在するオリエンタリズムを、戦時中の日本が台湾について記述した文章や現在の台湾がインドネシアなどへの経済進出（南進政策）のために書いた文章などにも注目して、現在も残る「植民地的想像力」を可視化したいと考えています。この展示は英国ダーラムにて1月後半から始まる予定です。



写真4：オリエンタル美術館(ダーラム)展示室

また、12月に英国ノリッチでの論文発表、3月に日本の文化政策学会での論文発表、米国ハーバード大学での論文発表、米国シアトルでの学会発表があります。